

フィリピン系ニューカマー二世代の 親子関係と地位達成に関する一考察 エスニシティとジェンダーの交錯に注目して

額賀美紗子 *NUKAGA Misako*

- 1 — 問題の所在
- 2 — ニューカマー二世代研究
- 3 — 調査方法と対象
- 4 — 分析
- 5 — まとめと考察

【要旨】 本論文はフィリピン系ニューカマー二世代の女性を対象として、親子間におけるエスニック文化継承に注目しながら、彼女たちの地位達成プロセスに関する仮説モデルの生成を目的とする。11名の半構造化インタビューからは地位達成プロセスに関する3つの分岐が見出された。第一のパターンは母から娘にフィリピン文化が「選択的継承」されることにより、学業達成を果たし上昇移動する適応過程である。第二のパターンは、母から娘にフィリピン文化が「包括的継承」されることによって、学業達成が阻まれ、日本社会のアンダークラスに留まる適応過程である。第三のパターンは、娘が母からのフィリピン文化の継承を拒否し、日本社会に同化することで日本のメリトクラティックな路線に乗り、学業達成を果たす適応過程である。以上の3パターン分岐の背景には母親の人的資本および日本社会との接点の多寡があることが明らかになった。

1 — 問題の所在

本論文の目的は日本社会に増えるニューカマー二世代の地位達成のプロセスについて、フィリピン系ニューカマー女性を事例に検討することである。2014年末の在留外国人統計によると、日本に住むフィリピン国籍所有者の総数は21万7585人で、中国、韓国・朝鮮に次いで国内で3番目に大きいエスニック集団となっている¹⁾。フィリピン系の場合はその数が急激に増えた1980年代から「興行」ビザを利用して入国した女性の多さが特徴的である。フィリピン系女性と日本人男性との結婚も増え、1992年から2014年までに15万2848組の日比国際結婚が成立している²⁾。その子どもの多くは日本生まれ日本育ちで日本国籍を所持するニューカマー二世代³⁾として、現在青年期・壮年期を迎えている。また、母の呼び寄せによって幼少期に来日した、フィリピン人を実父母とする子どもたちも二世代として日本で進学・就職を経験するようになってきている。このようにニューカマー一世代が家族を築くことによって今後日本社会で青年期を迎える二世代の増加が見込

まれるが、かれらの地位達成に関する研究はまだ端緒についたばかりであり、調査の必要性が生じている。

こうした現況をふまえ、本論文ではフィリピン系ニューカマー二世世代の女性を対象として、親子間における文化継承に注目しながら、彼女たちの地位達成プロセスに関する仮説的なモデル生成を試みる。

2——ニューカマー二世世代研究

移民二世世代に関する研究蓄積の多いアメリカでは、移民の地位達成に関して分節的同化理論が提起されている (Portes&Rumbaut 2001)。古典的な同化理論 (Gordon 1964) は、移民は自文化を棄てて主流のアングロサクソン文化に同化することによって地位達成が可能になると説明してきた。しかし 1965 年移民法改正によって中南米やアジア出身国の移民が急増したことを受け、二世世代の地位達成のパターンは多様化していった。新たに提唱された分節的同化理論はアメリカ社会が階層的に分断されていることを前提に、移民がどの階層に同化していくかに注目する。その際、重要なのは親世代の編入様式 (政府の移民受け入れ政策、社会における受け入れの文脈、エスニックコミュニティの有無)、人的資本、家族構造 (単親家庭か否か) とされる。これらが一体となって、3つの異なる親子の文化変容パターンが形成され、二世世代の地位達成の分岐を生むと考えられている。特に、「選択的文化変容」という概念によって示される、親がエスニック文化の一部を子どもに継承し、子どもはアメリカ文化を獲得すると同時にエスニック文化を維持することにより教育達成を遂げるという知見は古典的同化理論に修正を迫るものとして示唆に富む。

上記理論はエスニック集団間の地位達成の差異を、移民の人的資本や受け入れ社会の構造、そして親子の文化変容パターンから説明している点で日本のニューカマー二世世代研究にも示唆的である。一方、この理論を日本社会に応用する際には受け入れ文脈の違いを十分に考慮する必要がある (竹ノ下 2014)。アメリカ社会ほどではないにせよ、日本社会も教育を通じた階層間格差が進んでいると指摘されるが、エスニック集団に対する差別や移民政策はアメリカ社会と様相が異なる。こうした点に配慮し、アメリカ社会の分節的同化理論を援用しながら、日本社会に固有の地位達成メカニズムを解明することが課題である。

日本のニューカマー二世世代研究の困難のひとつは、大規模な客観的データが開示されていないことであるが、そうした制約の中で 2000 年国勢調査データを分析した鍛冶 (2011) はニューカマー二世世代の学業達成は、日本人やオールドカマーである在日韓国・朝鮮人と比べるとかなり低いことを指摘している⁴⁾。このことはニューカマー二世世代の学業達成を阻むなんらかの構造的制約が日本社会に存在していることを示している。そうした問題点が浮上する一方で現段階においてニューカマー二世世代の青年期までを対象とした研究は未だ稀少である⁵⁾。こうした現状を受けて、第一世代との関係性を視野に入れ

ながらニューカマー第二世代の学業・地位達成プロセスを明らかにすることが重要である。

また、日本のニューカマー研究における問題点のひとつとして、ジェンダー要因に対する注目の低さが指摘できる。アメリカの移民研究においてはジェンダーが第二世代の地位達成に及ぼす影響について明らかにされている。Portes&Rumbaut (2001) による第二世代対象の大規模調査は、男子よりも女子の方が学校の成績が良く、バイリンガルになる傾向が高いことを示した。その要因として、移民の親は息子よりも娘に対してより過保護的になり、娘の方には親の学業期待に応えやすい状況が生まれていることが指摘されている。また、娘たちは「文化の砦」(伊藤 1995) として⁶⁾、受け入れ社会の中でエスニック文化を維持することを母たちから求められる (Espiritu 2003)。それゆえに母文化も受け入れ社会の主流文化のどちらも獲得する「選択的文化変容」を男性に比べて経験する可能性が高くなり、その結果として学業・地位達成を成し遂げやすいと分析される (Portes&Rumbaut 2001)。こうしたジェンダーの影響が日本のニューカマー第二世代についても見られるのか、母と娘の関係に注目して検討する必要がある。

以上の先行研究をふまえ、本論文では母娘間のエスニック文化継承に注目しながら、以下のリサーチクエスチョンを検討する。

- ① フィリピン系第二世代の女性たちはフィリピン人母とどのような関係にあるのか。
- ② フィリピン系第二世代の女性たちはフィリピン人母からどのような文化を継承しているのか。
- ③ フィリピン系第二世代の女性たちの文化継承と地位達成に対して、フィリピン人母の人的資本と編入様式、家族構造はどのような影響を与えているのか。

3 — 調査方法と対象

2015年4月から8月にかけてフィリピンにルーツをもつ18歳から32歳の青年期の女性11名に対して半構造化インタビューを実施した。対象者は調査者が以前から学習支援をしていた若者やその友人、在日フィリピン系支援団体のネットワークなどに頼りながら、スノーボール方式で収集した。

調査対象者のプロフィールは、次ページの表1に示した。11名全員が日比国際結婚家庭に育つが、4名はフィリピン人母の連れ子であり実父はフィリピン人である。この4名はそれぞれ4歳、5歳(2名)、9歳で来日している。ほかの7名はフィリピン人の母と日本人の父の間に日本で生まれている。対象者の学歴は中卒から大学院卒までさまざまであり、高校卒業以下が5名、大学卒業以上が6名である。前述の鍛冶(2011)によればフィリピン国籍者の大学在籍率は3割に満たない。しかし、「フィリピン系ニューカマー」の中に日本国籍を所持する日比「ハーフ」も含むと大卒の割合は上がると推測される。本論文の調査対象者はそうした「フィリピン系」に含まれる若者の多様性を考慮して選定した。また彼女たちの母親11名のうち、7名はエンターテイナーとして、1名は農村花嫁、3名

はフィリピンで学生や社会人をした時に父親と出会って結婚に至っていた。

インタビューでは生い立ちや家族構成、経済状況に関する基本事項のほか、親子関係、フィリピン文化に対する理解や獲得の機会、フィリピン人アイデンティティ、学校経験、進学や就労状況を中心に尋ね、自由に回答してもらった。対象者とはカフェで会い、1回のインタビューにつき1時間半から2時間半をかけた。事前に許可をもらってインタビューを録音し、後日文字起こしして上記のリサーチクエスチョンを指針としながらデータをカテゴリー化して分析した。特に対象者を高卒以下と大卒以上に区分し、彼女たちの学業達成プロセスの違いに注目した。

4——分析

4-1 良好な母娘関係：母への敬意と思いやり

調査対象となった女性たちに共通していたのは、現在母と良好な関係を築いており、母に対する敬意と思いやりを語っていた点である。母の尊敬すべき点として挙げられたのが、日本語の習得をはじめとする日本社会への適応と母国への送金である。F7は母が仕事

表1 調査対象者一覧

年齢	生誕地	親の国籍	本人国籍	最終学歴	現在の職業	親の学歴	第一言語	タガログ語	親子言語	婚姻 (パートナー)	親との交流	
F1	32	フィリピン (5歳来日)	実父：フィリピン 継父：日本 実母：フィリピン	日本 (帰化)	大卒→ フィリピンの 院卒	会社員 (財団系)	継父：大卒 母：フィリピンの 大卒	日本語	よくできる	日本語、現在は時々タガログ語	既婚、日本人の夫	良好 (別居)
F2	31	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本	大卒	事務員 (クリニック) ・臨床心理士	父：院卒 母：アメリカの院中退	日本語	聞く：まあできる 話読書：まったくできない	英語、現在は日本語とのミックス	独身	良好 (別居)
F3	23	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本	大卒→ 院在学中	大学院生 (臨床心理士めざす)	父：高卒 母：フィリピンの大卒	日本語	まったくできない	日本語	独身	良好 (同居)
F4	23	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本	大卒	会社員 (国際部)	父：高卒 母：フィリピンの大卒	日本語	よくできる	日本語	離婚、シンガポール人の前夫	良好 (別居)
F5	24	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本と フィリピン	大卒→ フィリピンの院在学中	日本語教師 (フィリピン在住)	父：高卒 母：フィリピンの高卒	日本語	よくできる	日本語	独身	良好 (別居)
F6	20	フィリピン (4歳来日)	実父：フィリピン 継父：日本 実母：フィリピン	日本 (帰化)	高校中退	専業主婦	不明	日本語	書く以外はよくできる	日本語とタガログ語のミックス	既婚、日本人の夫	良好 (別居)
F7	21	フィリピン (5歳来日)	実父：フィリピン 継父：日本 実母：フィリピン	フィリピン	中卒	事務員 (メーカー会社)	継父：高卒 母：フィリピンの大卒	日本語	よくできる	タガログ語	独身	良好 (近居)
F8	19	フィリピン (9歳来日)	実父：フィリピン 継父：日本 実母：フィリピン	フィリピン	高校中退	職員 (介護施設)	継父：大卒 母：フィリピンの高卒	タガログ語	よくできる	タガログ語	独身	良好 (同居)
F9	28	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本と フィリピン	フィリピンの大学中退	専業主婦	父：不明 母：フィリピンの高校中退	日本語	よくできる	タガログ語	既婚、フィリピン人の夫	良好 (近居)
F10	25	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本と フィリピン	高卒	専業主婦 +パート	父：高卒 母：フィリピンの高卒	日本語	聞く：まあできる 話読書：あまりできない	日本語とタガログ語のミックス	既婚、日本人の夫	良好 (近居)
F11	23	日本	実父：日本 実母：フィリピン	日本	大卒	アルバイト (英語教室講師・外国人支援団体)	父：高卒 母：大卒	日本語	まったくできない	日本語	独身	良好でない →良好 (別居)

注1 F1～F5：選択的継承パターン F6～F10：包括的継承パターン F11：継承拒否パターン

注2 上記「第一言語」とは対象者が一番得意と回答した言語を指す。

で稼いだお金を定期的にフィリピンの親族に送っていることに対して次のように語る。

——お母さんのことはリスペクトしている？

F7：していますね。

——どういうところがすごいと思う？

F7： やっぱフィリピンって結構仕事がなかったり、そんなに、あんまり日本みたいに景気が良くないから。家族がいっぱいいる中で唯一日本で永住者として、今でもそこまでお金持ちとかっていうわけじゃないんですけど、日本で働けている環境にいるのってお母さんだけなので。なので、17歳のときから、「日本で、私はもう頑張るから」って言って日本に来て、「一番上だから、絶対に妹たちを助ける」って言って、今でも自分の妹とか弟に毎月仕送りをして。

(2015年6月27日 インタビュー)

移民やニューカマーに関するこれまでの研究では、子どもの同化速度が親よりも早いために親子間の役割逆転が生じ、子どもが親を見下したり、反抗的になったりすることが指摘されている (Portes&Rumbaut 2001)。今回調査した女性たちも、思春期の頃には母との関係に葛藤を覚えたり、母に反抗したりすることがあり、母娘の関係が常に良好であったわけではない。たとえばF3は日本語力が乏しく、日本の学校について知識を持たない母に対して自分の方が教える立場になることに葛藤を抱くようになっていた。一方で彼女は母を「強い人」と評し、母に逆らうことはなく「適応的に」「順応的に」過ごしてきたと回答する。対象者のうち8名はF3のように母に対して葛藤を抱きつつも大きな反抗に至ることはなかったが、3名 (F6、F7、F11) は思春期に激しく母に抵抗している。彼女たちは母がフィリピンに帰りたいと発言したり、日本語を理解しないことに対して苛立ちを覚え、母と口を聞かなかったり、激しく口論したりした。しかし、成長する過程でフィリピンの社会経済状況や、フィリピンにいる親族を経済的に支えたいという母の気持ち、そして来日後に母が経験した苦勞を深く理解するようになっていった。F6は「(母には) なんかこっちが合わないのが分かるなみたいな。『私はフィリピン人だ』っていう気持ちが(今は) なんか分かるんです。」と語った。この言葉からは、フィリピン・ルーツの共有を通じて母と娘の間に強い絆があることが見受けられる。

このように、女性たちは葛藤や反抗の期間を経てフィリピン人である母の生き方を尊重し、母が日本社会で経験してきた苦難を思いやるようになっていた。このことは母娘関係において、母が娘たちに対して権威を維持し続け、娘たちの進路選択や将来展望に関して影響力を行使することを意味する。徳永 (2008) が指摘するように、母は娘たちにとっての「重要な他者」であり、人生の指針を与えてくれるロールモデルになっているといえるだろう。教育戦略の研究においては子育ての担い手である母の意識や実践が注目されてきたが (本田2008)、フィリピン系の女性において母との結びつきが非常に親密な傾向にある

ことを考えると、母がもつ価値観や母の日本社会への適応が女性たちの学業達成やアイデンティティ、生き方に及ぼす影響は大きいと考えられる⁷⁾。

では、フィリピン系の母が娘に対して権威を保ち、敬意や思いやりを抱かせることができているのはなぜなのだろうか。国内外のフィリピン系移民を扱った研究では、親たちが「家族中心主義」⁸⁾をフィリピン文化の中核に据えて受け入れ社会の中で子どもたちに伝達していくことが指摘されている (Wolf 2002, Espiritu 2003, 額賀 2012, 三浦 2014)。今回調査対象となった女性たちも例外ではなく、「家族を大切にする」という価値観がフィリピン文化の特徴であることに全員が同意した。この家族中心主義の価値観のもと、女性たちは幼少期の頃から母と行動を共にしてフィリピン文化に関わる経験をするが多かった。重要な共有経験としてフィリピンへの一時帰国がある。母と娘は多い場合で毎年、少ない場合でも3、4年に一度はフィリピンに里帰りしており、滞在中は親族の家に泊まるのが慣例となっていた。この滞在経験の中で女性たちは母との関係を中心にフィリピン文化における家族中心主義の価値観を自分の中にとりこんでいくことがうかがえる。フィリピン滞在中はフィリピン文化に精通している母の権威が強調され、母は帰国後も娘の態度や行動に関して影響力を及ぼすことが可能になると考えられる。

4-2 母娘の文化変容と娘の地位達成：3つのパターン

では次に母から娘へと伝達されるフィリピン文化について検討していく。インタビューからは以下の5つの文化要素を抽出した⁹⁾。①貞淑な女性性：「エンターテイナー」イメージへの抵抗 ②家族中心主義：日比にまたがる大家族成員のつながりを重視し、個人より家族の利益を優先させる価値観 ③家族内のケア役割：フィリピンへの送金義務 ④宗教：教会に参加 ⑤言語：タガログ語。この中でとくに貞淑な女性性と家族のケア役割については女性に特徴的な文化として注目する。

本論文では文化継承の様相について11名の対象者を3つのパターンに分類した。第一はフィリピン文化の要素が選択的に娘に継承され、学業的成功に結び付くパターンである(=「選択的継承」、5名)。第二はフィリピン文化が包括的に娘に継承され、学業からの早期離脱が促されるパターンである(「包括的継承」、5名)。第三は娘が母からのフィリピン文化継承を拒否し、それが学業達成に結び付くパターンである(=「継承拒否」、1名)。以下では3つのパターンを詳しく検討していく。

(1) フィリピン文化の選択的継承と学業的成功(事例：F1,F2,F3,F4,F5)

第一のパターンは、女性たちが日本社会で学業達成を収めるにあたって適格的、もしくはそれに抵触しないフィリピン文化を選択的に継承し、その結果として高学歴、安定した職業を獲得している場合である。この選択的継承パターンに該当する女性たちは大卒1名、院卒2名、院在学中2名である。就職している3名はそれぞれグローバル展開する国内大手企業、国際交流系シンクタンク、多文化外来のあるクリニックに勤務しており、職

場では語学力や国際経験を活かしていた。彼女たちに特徴的なのは、母から「貞淑な女性性」が継承される一方で、家庭内のケア役割とタガログ語というフィリピン文化の要素の継承が軽視されてきた点である。

まず、「貞淑な女性性」の継承について検討する。フィリピンはカトリック国家でもあることから性に関する厳格な規範がある社会である。特に女性に関しては、成人するまで性的な関係は厳しく制限されており、つつましい女性性が美德とされている (Espiritu 2003)。しかし、日本社会においては、貞淑さとは真っ向から対立するフィリピン人女性のイメージが浸透している。興行ビザを使って夜の飲食店で働くというルートが在日フィリピン女性の一般的な入国ルートであったため、フィリピン人女性が水商売に従事するというステレオタイプが根づいている¹⁰⁾ (小ヶ谷 2004、高畑 2011)。

5名の女性たちは、このような日本におけるフィリピン人女性の否定的なイメージに対して非常に意識的であり、そうした偏見に抗う語りや行動をとってきた。インタビューの中では、夜の飲食店で働くフィリピン人ホステスと「フィリピンマニア」の日本人男性客といった日比国際結婚のステレオタイプに対する反発が多く聞かれた。5名のうち3名は母がエンターテイナー以外の経路で入国し、父親との結婚に至っている。たとえばF5の母は農村花嫁として来日し、集団見合いで父親と出会って結婚した。彼女は日本社会におけるフィリピン人女性のイメージに対して強い反発を表した。

前に、新聞配達のおばさんが母を見て、「何だ、おまえは水商売で働いているのか」と言われたのを私がたまたま聞いてしまいました。私の母は水商売なんてしてないし、今までしたことがないんですよ。なのに、「フィリピンの女の人」イコール「水商売」というステレオタイプがあるんですよね。 (2015年8月19日 インタビュー)

フィリピン人女性に対する強い偏見に直面してきた彼女は、母の来日経緯に強い関心を持ち、フィリピンの農村花嫁をテーマに大学院で研究を続けている。彼女は自分の家族とエンターテイナー出身の家庭とを「一緒にしてほしくない」と語った。

F3の母はフィリピンで学生をしているときに、企業研修で派遣された父と学校で出会い、結婚に至った。エンターテイナーというフィリピン人女性から通常想起されるイメージとは異なるルートで両親が結婚したことに彼女は誇りを持っている。

(自分が半分はフィリピン人だと) 知ってほしい、そうですね。フィリピンって結構マイナスイメージがあるじゃないですか。女性がパブとかで働いていて、そこにお客さんで来た人が結婚するというのが、結構大きな割合を占めているじゃないですか。でも、運よく言うとあれなんですけど、私の家はそういうパターンではなかったので、私はそこをすごく強調したくて。(…) フィリピンだからちょっと軽いでしょうみたいな感じで思われるのがすごく嫌で、だから言わないこともあるんですけど、言う

ときは、ステレオタイプで見ないでっていう意味で言ったりしています。

(2015年5月16日 インタビュー)

この語りからは、彼女が日本社会におけるフィリピン人女性のステレオタイプを強く内面化しており、自分もまた「フィリピンだからちょっと軽い」と思われることを強く警戒していることがわかる。彼女は「軽い」という言葉を「ちゃらい」と言い換えたりもしていたが、これらの言葉は特に性的に奔放で浮わつた女性のイメージを指していると思われる。

F3とF5は自分たち家族と、「水商売」からの出会いが想起される日比国際結婚家族の間に明確な一線をひく発言をインタビューの中で度々していたが、こうした差異化の語りは選択的継承パターンに該当する女性たち全員に見出された。彼女たちは自分たちをフィリピン人家族の「例外」と位置付け、フィリピン人女性が性的に奔放であるというステレオタイプに抗う姿勢を強く見せた。上記のF3はフィリピン人女性に対する否定的な意見を耳にするときは、「私に言っているわけではないと思うんですけど、何か言っていたりすると、私に言われたような感じがして、『そういうことを言うの、やめて』って言います。」と話す。また、F5は、農村花嫁の研究に従事する理由について『全員が全員悪いことをしたわけでもないし、フィリピンパブとかが一時期すごくはやりましたけど、みんながみんな水商売で働いているわけじゃないということを知ってほしかったです。』と語る。

こうした彼女たちの実践は、日本社会がフィリピン人女性に付与するステレオタイプに対抗する戦術であると解釈できる。彼女たちは過剰な男女交際を慎んで学業に励み、日本のメリトクラシー路線に乗って大学を卒業して定職につくという将来ビジョンを持っていた。また、日本人であるという意識を持つと同時にフィリピン・ルーツを意識的に表出することに熱心であった。そこで彼女たちが日本社会や若い世代のフィリピン人に向かって提示しようとしているのは、F3の言葉を借りれば「こういうフィリピン人もいる」ということである。彼女たちは否定的なフィリピン人女性のステレオタイプを参照点として、そのイメージを裏切る「模範的」なマイノリティとして学業達成を目指してきた。

こうした女性たちの姿勢の背景には、母による「貞淑な女性性」の伝達があることがうかがえる。彼女たちは自分の母を「まじめ」「ちゃんとしている」と評し、「ちゃらい」「軽い」と日本社会で揶揄されるフィリピン人女性のイメージとは異なることを語っていた。たとえばF4の母は興行ビザで入国し、夜の飲食店で父親と出会っているが、彼女は父親が「フィリピンマニア」ではなく、二人は「偶然の出会い」で結婚したことを強調していた。それは彼女の両親の語り方をそのまま受け継いでいる。そして母が通常想起される「フィリピンのママ」とは異なり、「すっごいまじめ」であることを語った。

どっちかという、私的には珍しいタイプだと思っているんです。フィリピンのママって結構適当やったり、教育に無関心ではないけど、ほんとに放置で、その子が好き

勝手にいたら何も言わずに、「手を付けられないから」みたいなので終わらせるお母さんが多いですけど、ママはすごいまじめやから、「学校はちゃんと行きなさい」、時間もすごい厳守。珍しいですけど、日本人より早く着くくらい。時間厳守とか、すごい厳しくて、パパが自由奔放な部分はママがカバーして、何とかぎりぎりいい感じのバランスを保ってきたみたいな。もしママが適当やったら、私は自分でもどうなっていたか分かんですね。

(2015年5月26日インタビュー)

F4の発言からは、母が時間厳守という日本社会のルールに敏感で、娘の教育に関しても気を配り、学習を促していたことが分かる。また、男女交際に関しても大変厳しく、「ほかの（フィリピンの）家の子たちは、何やかんや言って、それこそ手が付けられないとかになる人が多いけど、ママはすごい厳しかった。もう死ぬほど。」と述べる。高校時代に彼氏ができ、門限の時間をめぐって母とは激しい口論をしたが結局母には勝てなかったという。ここには「貞淑な女性性」を重んじるフィリピン人の母の価値観が見てとれる。母自身がフィリピン人女性に対する日本社会の偏見を強く意識し、それに抗う姿勢を娘たちに呈示しているのである。

一方、母たちはタガログ語や送金義務というフィリピン文化の継承を軽視していた。フィリピンで生まれ育った母たちの第一言語はタガログ語であったが、彼女たちは家庭内で日本語を積極的に使用していた。この判断の背景には、母たちが日本社会で娘が学業的成功をおさめるためにはタガログ語が有効な資源にならないという洞察があったのだろう。女性たちは家庭の中で日本語を第一言語とし、日本の学校に適応するために必要な資源を就学前から備えていたといえる。また、よりグローバルな戦略的視点から英語を家庭内言語にしていた母も1名いた。F2は母が「たぶん戦略的に」英語使用を選択したと振り返り、「(タガログ語は) そんなに強いられていないです。実際、使う機会もそんなにないので。英語は絶対、武器としては必要だから。」と話していた。彼女はその後父親の仕事でアメリカに3年間駐在し、英語力を活かして高い偏差値の高校・大学に進学したが、この過程において母の英語戦略が功を奏したといえるだろう。

家族ケアに関しては5名中3名の母が定期的にフィリピンの親族に送金をしていたものの、女性たち自身は送金することを母から期待されていなかった。女性たちは皆、家族が助けあうことは「あたりまえ」だと考え、より裕福な生活を日本で享受している母がフィリピンの親族にお金を送ることに理解を示していた。その一方で自分が送金することに対しては消極的であった。たとえばF2は「そこまでのつながりが（フィリピンの親族とは）ない」と言う。つづけて、「よほど困っているとかなったら寄付ぐらいはするかもしれないですけど、(…)そこは、やっぱり世代が代わると変わるんですかね。日本に来たりとかすると、もてなしたりはしますけど。」と話した。母が行ってきた送金の義務は自分には課せられないと感じており、これからも送ることはないだろうと話す。女性たちはフィリピンに住む親族に好意を持ち、訪問やSNSを通じて交流を続けているものの、生計の

単位としての家族は日本国内に居住する核家族であると考えていた。拡大家族のための就労という将来を母から押しつけられることなく、彼女たちはフィリピンの家族からの自律性を獲得し、自分の欲求や目的を最優先する環境に身を置くことができていた。このことが女性たちの学業達成を促す大きな背景になったと考えられる。

(2) フィリピン文化の包括的継承と学業からの離脱（事例：F6,F7,F8,F9,F10）

第二のパターンは、女性たちが母からフィリピン文化を包括的に継承し、その結果として学校から早期に離脱し、経済的に不安定な生活を送っている場合である。5名の最終学歴は中卒1名、高校中退3名、フィリピンの大学中退1名である。そのうち3名が専業主婦で子持ち、ほかの2名は正社員として雇用されているが、全員経済的にはゆとりがあるとはいえない状況である。全員の母がエンターテイナーとして父親と出会い、婚姻に至っていた。

このパターンの女性たちに共通してみられたのは、フィリピンの親族との結びつきが非常に強く、母とはタガログ語（と日本語の混合）で話し、フィリピン文化との接点を幼少期から多く持っていた点である。そして彼女たちはフィリピンの親族に送金したいという強い思いを共有していた。前節で述べたように、女性たちは仕事で稼いだお金をフィリピンの親族に送る母に対して敬意を払い、母をロールモデルとして自分も送金をして母を助きたいという気持ちを強く表明した¹¹⁾。インタビューでは以下のような語りが聞かれた。

——自分でお金を稼いで、フィリピンの親族に送金することを考えたりすることはありますか。

F6: うちにはあります。やっぱりお母さんがそれをしていたから、「それをやってあげるのも、次はうちの世代だろうな」みたいな。それをやりたくて、だから、職に就きたかったっていうのもあるんだけど、やっぱりそこで初めて働くつらさを知ったっていうか、難しさっていうか。それをうちのお母さんはずっとやっていたって考えたら、すげえなって思って。「やっぱり簡単にできることではないんだろうな」みたいな。自分の生活もあるのに人にお金をあげるって、相当……。だから、心が広いのか、「それが、日本に出稼ぎに来た人の使命ではないけど、それなのかな」みたいな。
(2015年5月14日 インタビュー)

また、女性たちの送金意欲を高めているのは、母との親密な関係のほかに、親族との強い結び付きであることも推察できる。5人のうち、F6、F7、F8はそれぞれ4歳、5歳、9歳までフィリピンの叔母や祖父母のもとで育てられた。彼女たちは来日後もフィリピンに母と里帰りし、祖父母や親戚との交流を維持している。F9とF10は日本生まれであるが、それぞれ母のすすめで中学生、大学生のときにフィリピンに留学をしており、その際親族との交流を深めている。親族は日本からの送金を強く期待しており、彼女たちもその期待

を受け止めてフィリピンの親族を助けることを「当たり前」だと考えていた。このように包括的継承パターンに該当する女性たちはフィリピンの家族中心主義を非常に強く内面化しており、フィリピンの家族にお金を送るために働いて稼ぐという価値観を母から強く受け継いでいた。彼女たちは母を通じて日比にまたがるトランスナショナルな家族の中に成員としてとりこまれ、「家族のために尽くす」という価値を実践しようとしていた。

注目したいのは、女性たちが送金役割をはじめとする「トランスナショナルな家族ケア」(額賀2014)を、フィリピンのジェンダー規範と関連づけて理解している点である。F7は、「向こう(フィリピン)では男の人は働かない。むしろ女の人が働いていて当たり前くらいだから」と話す。彼女の母にインタビューした際も同様の意見が述べられた。実際にフィリピンでは男女の賃金格差が小さく、女性は「良き妻」であると同時に結婚・出産後も就労して経済的に夫を支えることが社会的に奨励されている(スタインバーグ2000、小ヶ谷2005)。包括的継承パターンの女性たちは母からそのようなジェンダー規範を受け継ぎ、自分もまた母と同じようにフィリピンにいる家族を支えられる女性になりたいと考えていた。

しかし、送金役割の強い継承は、学業からの離脱を促す効果をもっていた。女性たちは早く仕事をしてお金を稼ぎたいという思いを強くもち、学校に通うことに意義を見いだせなくなっていった。F7は全日制の高校を受けたが不合格となり、「学校でやりたいことがあんまりなくて、高校行ってもしょうがないなって」思い、高校に進学せず、バイトの世界に身を投じた。F6とF8は通信制高校に入学したが、早々に通うことをやめている。F8は、「勉強する意味がないと思った」という点を強調し、「それよりお金がほしかった」と話す。彼女はお金を稼いで母の送金負担を軽くし、自分も車を買うことを当面の目標にしている。そのためにバイトを一日に二つかけもちし、「ほんとに死んでました、おかしくなっていた。」と話した。F6もまた教育費を気にして高校をやめ、「(お金がかかるの)だったら、もうやめた。だったら働く」と決意し、就労の世界に足を入れている。彼女は専門学校に行ってネイルの勉強をすることを考えたこともあったが、「やっぱりそれにもお金がかかるから。兄弟がいっぱいいるし」と考え断念している。フィリピンへの送金などから、経済的に厳しい家計や他の兄弟、そしてフィリピンの親族のことを考慮し、自らが我慢をするという選択をしていた。ここにも家族中心主義の影響をみることができる。

また彼女たちに共通していたのは、学業から早期に離脱して就労することに関して両親が特に口出しをしていない点である。進学に関して両親の態度を尋ねると、「好きにしなさいって」「何も言わなかった」「やる気がないなら高校に行かなくていいって」という回答であった。選択的継承パターンに該当する女性たちの母が学校で「ちゃんとすること」を強く娘たちに要求していたのとは対照的である。母たちは日本の学校や受験制度に関する知識がほとんどなく、有益なアドバイスを娘にすることができていなかった。女性たちは日本における学歴の効用を十分に知ることができないまま、労働の世界に身をおく母をロールモデルにして学業から早期離脱していったと考えられる。

また、5人のうち3人はパブやスナックで就労した経験をもっていた。フィリピン系の友達の紹介で始めることになり、給料がいいので驚いたと話す。F8は介護施設で日中働き、夜はパブで働く生活を続けていたが、当時の月収は40万円を超え、その半分をフィリピンに送っていた。しかし、そのパブが「お客さんをだます」ことに気づいた後は自分がその行為に加担していることに嫌気がさし、3か月で辞めた。F7もまた高い給料に後ろ髪をひかれつつ「彼氏への罪悪感」からもう二度とやらないと決めた。一方、F6はスナックで働く経験が様々な職歴の中でも一番「合っていた」と語る。彼女はスナックで求められる気遣いのスキルを「母譲り」であると考え、「フィリピンの人たちって、多分そういうのが多いのか、うちのお母さんもそうだったんです。」と話した。

彼女たちは女性性が商品化される場で働くことにどこか後ろめたさを感じており、結局長続きせずに辞めている。ここには母たちが「貞淑な女性性」を娘たちに伝達していることもあるだろう。F7やF8の母は男女交際に厳しく、自分のように夜の仕事をしてほしくないとも考えていた。そうした母の気持ちを理解する娘たちは、自分がホステスとして働いていることを母に告げていない。しかし、母自身がホステスをしていた経験があることを知っている女性たちにとって、パブやスナックは完全にタブーとなる仕事ではない。むしろ、母をロールモデルとする彼女たちにとっては収入のいい身近な仕事として捉えられたりもする。この結果、彼女たちは自ら意図しなくとも、「フィリピン人女性＝エンターテイナー」という既存のイメージを再生産していくこととなる。このことは、選択的継承パターンの女性たちがエンターテイナーイメージに抗う「新しいフィリピン人女性像」を打ち立てようとしているのとは対照的である。

(3) フィリピン文化の継承拒否と学業的成功（事例：F11）

第三は、母から娘にフィリピン文化が継承されず、それが結果的に学業達成に結び付くパターンである。このパターンに該当するF11は、インタビュー時点で大学を卒業して1年目で、3年生時に留学をしていたため就職活動で遅れを取り、新卒で就職することは断念した。インタビュー当時は外国人生徒向けの学習支援室コーディネーターや母の英会話教室の講師を務めながら、来年度に向けて就職活動を開始しようとしていた。

F11は母の英会話教室で働いていることもあり、現在母と頻繁に連絡を取り合い、一緒に買い物や娯楽施設に出かけることも多い。しかし、そうした母との関係は大学入学以降のことで、思春期から高校生までの間は母に対して強いわだかまりがあったと話す。彼女の母は社会人の時に出張でフィリピンを訪れていた父親と出会って結婚に至っており、日本に移住する前はパブで働いた経験はなかったが、彼女が小学校低学年になったときにフィリピン人の友人に誘われて歌舞伎町にある、「ザ・それなパブ」で働き始めたということであった。F11は母が夜仕事に出かけて華やかな水商売の世界にいることを受け入れられず、父と一緒に猛反対した。家族は父の地元に住んでおり、地縁の強い地域で近所の人たちがパブで働く母を良く思っていない様子も気がかりだったという。結局母は夜の仕事を数年

間続け、F11が小学6年生のときによく辞めた。また、母の金遣いが荒く、闇金融で借金を作ってしまったことが彼女の憤りを一層激しいものにした。こうした母の行動によって夫婦仲は険悪になり、彼女は中学3年のときに両親の離婚を経験した。

母に対する憤りは、母に象徴されるフィリピン文化の拒否へと結びついていった。彼女は「日本人になりたい」と強く願い、自分のフィリピン・ルーツを学校で隠し続けてきたという。小学校5年生までは母と一緒に毎年1回フィリピンに滞在していたが、両親の仲が険悪になってからは母に同行しないことに決めた。彼女はフィリピン文化について、「女性がうるさい、わがまま、自分勝手」と形容する。それは彼女の母に対する評価と重なる部分がある。

興味深いのはF11が母を反面教師として「理想的な女性」像を模索している点である。彼女は自分の母には母らしいことを何一つしてもらわなかったと語り、だからこそ自分は努力して勉強して「ちゃんとしたお母さんになりたい」と語った。

私にはお母さんみたいな存在がないから、自分はちゃんとしたお母さんになろうみたいな。そういうのがあって、いろんな子育ての本とか、女性とは何かみたいな本をすごく読むんです。『女性の品格』は、高校一年生のときに読みました。女の人って何だろうみたいな。
(2015年6月11日 インタビュー)

「女性の品格」を身に着けたいと願う彼女の意識は選択的継承に該当する女性たちと同様であるが、彼女の場合そうした意識は母と自身のフィリピン人アイデンティティを否定し、日本人に同化することの上に成り立っているという点で異なる。

母に対する拒絶は、両親の離婚の際にF11が父親の側についたことから明らかである。彼女は「母と一緒にだと人生がダメになると思った。勉強したいと思ったので父の側にいた方がいいと思った」と語る。日本の学校や受験制度に関してほとんど知識を持たず、子どもの教育にほとんど関心を示さない母がそばにすることで、勉強する機会や勉強する意味を奪われ、「人生がダメ」になると考えたのである。両親の離婚後、彼女が母と会うのは年に1、2回になり、母と離れたことによって気持ちを落ち着け、勉学に励むことができたという。彼女は「とにかく勉強したかった」と語り、そのために父に頼んで小学生から高校生まで塾に通わせてもらっていた。学校時代を通じて成績は良く、高校は進学校に進学、大学も国立大学に進学している。

F11の事例は、娘がフィリピン人の母をロールモデルとせず、むしろ反発してフィリピン文化と断絶することによって日本社会との接点を深め、学業達成を成し遂げるパターンがあることを示唆する。しかし、フィリピン文化を拒否するこのパターンはそれほど多くないと思われる。彼女の場合、両親の離婚があったからこそ母娘の間に距離ができたが、同居を続けていた場合、娘に対する母の影響力は継続していただろう。本調査のほかの女性たちにも母への一時的な反抗はみられたが、やがては母の立場や心情を思いやり、母を

モデルとした進路を歩んでいる。母に対する強い反抗とフィリピン文化の拒否がどの程度一般的な事象なのか、データを蓄積して検討する必要がある。

4-3 文化継承と地位達成パターン分化の要因：母の人的資本・編入様式・家族構造

以上、フィリピン系の母娘の間にみられる文化継承と地位達成の3つのパターンをみてきたが、その分岐の要因はなにか。この節では構造的な視点から、家族の編入様式（特に日本社会/エスニックコミュニティとの関係）、母の人的資本（学歴と収入）、家族構造に注目した分析を行い、3つの文化継承パターンについてそれぞれ異なる背後要因が見られることを示したい。

まず、選択的継承の場合、このパターンに該当する女性たち5名のうち4名は母がフィリピンで大学まで進学しており（1名はアメリカの大学院中退）、比較的高学歴であることを挙げられる。しかし、1名の母は高卒であり、母の学歴が低くても学業達成につながる例もみられた。来日後の生活は比較的経済的に安定しており、5名中4名は塾や家庭教師、私立学校の学費など教育費を親に捻出してもらうことが可能であった。全員に共通していることは、母が在日フィリピン人コミュニティとは距離をとり、日本社会のメインストリームに参入していることである。母たちは日本語を学び、通訳ボランティアとして日本の学校に関わりをもったり、地域のイベントに参加したり、幼稚園や小学校を通じて日本人の友達をつくっていた。あるいは、日本人の夫が媒介となって日本の学校や社会の制度について知識を獲得する機会を得ていた。つまり、母が日本社会に参入し、同化できる条件がある程度整っており、そのことによって母たちはどのようなフィリピン文化の要素が日本社会で成功するうえで大切か、戦略的に取捨選択したうえで子どもたちに伝達していたと考えられる。さらに、日本人と多く接する中で日本社会における否定的なフィリピン人女性のステレオタイプに敏感になり、それに抗う姿勢を強めていったことも考えられる。

次に、母から娘にフィリピン文化の包括的継承が行われている場合、共通していた点として母が高校中退1名、高卒2名、大卒1名、不明1名と第一の選択的継承パターンに比べると学歴が低いことが指摘できる。また、母の実家が経済的に困窮しており、送金を母に強く期待している。このため、5名全員がエンターテイナーとして就労していた経験をもつ。来日後の生活に金銭的なゆとりはさほどなく、母はバブや工場で夜間働いてフィリピンに送金を欠かさず行っていた。このため、子どもの教育費の優先順位は低くなり、このパターンの女性たちは塾や習い事を経験していない。コミュニティに関しては、母が仕事以外で日本人女性と出会う機会はほとんどなく、子どものことを相談できる相手が日本に住むフィリピン人女性、あるいはフィリピンに住む親族に限定されている。母たちは日本社会との関わりが希薄であり、その一方でフィリピンの文化や社会と強くつながる生活を日本の中で実践している。特に、定期的な送金を通じてフィリピンの家族との関係は緊密であり、日比にまたがるトランスナショナルな家族が形成されている点に注目した

い。また、5名中3名の女性が地域の教会に定期的に通い、フィリピン人女性同士の交流を深めている。つまり、このパターンに該当する女性たちの母は日本社会への文化的・構造的同化が非常に限定される条件下におかれている。このことが、娘たちへのフィリピン文化の包括的継承へと繋がっていくと考えられる。

最後に「継承拒否」の場合であるが、この事例が特殊であるのは、両親が離婚をして母と娘の関係が一時的であるにせよ学齢期に断たれた点である。父との同居を選んだ結果、フィリピンの文化や社会との関係が断ち切れ、娘は日本人の父を通じて日本の学校や社会との関係を深めていった。この過程で学歴の効用といった日本のメリトクラシーに対する意識が高められ、大学進学が促されたと考えられる。

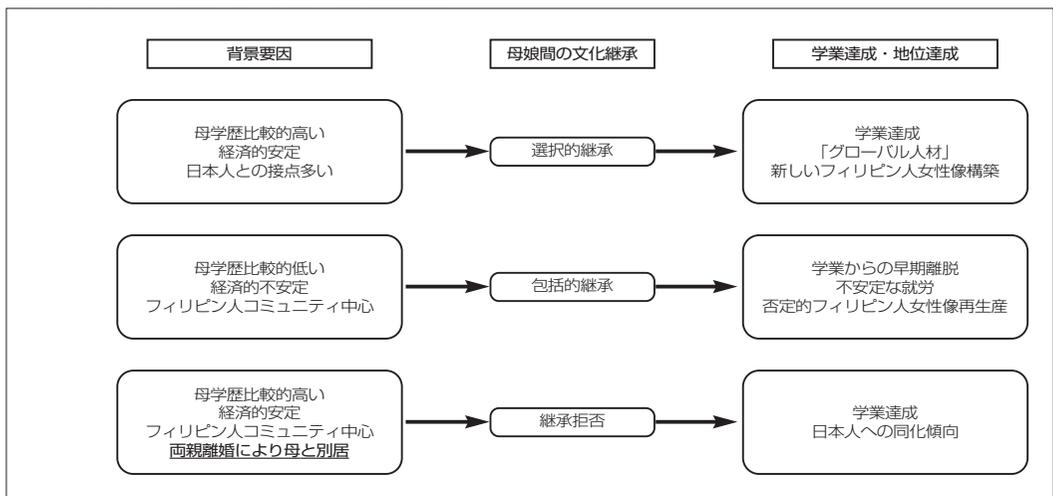
5 — まとめと考察

本論文で明らかにした3つの地位達成分岐モデルを以下に図示する (図1)。

第一のパターンは母から娘にフィリピン文化が「選択的継承」されることにより、学業達成を果たす適応過程である。その中にはフィリピン人としてのアイデンティティや、英語に堪能であることを活かして、「グローバル人材」として活躍する志向を持つ者もいた¹²⁾。第二のパターンは、母から娘にフィリピン文化が「包括的継承」されることによって、学業達成を阻まれ、日本社会のアンダークラスに留まる適応過程である。第三のパターンは、娘が母からのフィリピン文化の継承を拒否し、日本社会に同化することで日本のメリトクラティックな路線に乗り、学業達成を果たす適応過程である。

本論文では以上の3パターンの分岐に、親が所有する人的資本と日本社会との接点の多寡が関係していることを指摘した。親の学歴が比較的高く、家族が経済的に安定し、母が

図1 フィリピン系女性二世世代の地位達成過程



日本社会との接点を多く持つ場合、フィリピン文化の継承は選択的に行われて娘の学業達成が促される。親の学歴が比較的低く、家族が経済的に困窮し、母の日本社会との接点が少なく、フィリピンの家族や在日フィリピン人との結びつきが非常に強い場合、フィリピン文化の継承は包括的に行われて娘の学業達成は阻害される。また母と娘の関係が断絶し、文化継承の程度が低い場合も、日本人の父親の人的資本や日本社会とのつながりを通じて学業達成が可能になっている。

3パターンの比較から明らかになったことは、フィリピン人の母がエスニック同胞集団に留まり、日本の学校や日本人の母との接点が少ないことによって、娘たちがフィリピン文化のジェンダー役割規範から抜け出せず、学業達成が阻害されたということである。一方、母が地域の国際センターや日本の幼稚園、小学校への参加を通じて日本人との交流が多い場合、その娘たちはフィリピン人に対する日本社会の否定的なステレオタイプを反面教師として学業に真面目に励み、「モデル・マイノリティ」としての自己意識を高める傾向がみられた。注目したいのは、選択的継承を経て学業達成を成し遂げた女性5名のうち、2名の母はエンターテイナーとして入国している点である。つまり、母がエンターテイナーとして父親と出会ったか否かは、分化パターンに大きな影響を及ぼしていないと考えられる。むしろ来日後に母が日本人と交流し、日本の学校や社会と関わる条件がどの程度整っているかという点が、文化継承を「選択的」にするか「包括的」にするか、その結果として学業達成を推進するか抑制するかという違いを生んでいることが指摘できる。このことから、外国人の子どもの学力や進学を支えるにあたっては親を巻き込んだ支援が必要不可欠であることが示唆される。フィリピン文化を維持しつつ、日本のメリトクラティックな価値観を取り入れるような「選択的継承」の機会を親子に与えるようとりくみが、自治体や学校に期待される。

さらに3つの適応パターンにおいて「フィリピン人女性であること」はそれぞれ女性たちにとって異なる意味をもつことが明らかになった。「選択的継承」パターンの女性たちは、「真面目で」「貞淑な」女性性をフィリピン人女性の規範として母から受け継いでいた。こうしたフィリピン人女性の規範は、日本社会における「良妻賢母」像を母と娘が内面化することによって、より強化されていると考えることもできる。日比両国における「貞淑な」女性像を模範とする女性たちは、学業達成を果たして社会で活躍することにより、新しいフィリピン人女性のイメージを日本社会に作り出そうとしていた。一方、「包括的継承」パターンの女性たちは、フィリピン文化におけるジェンダー規範を強く内面化し、就労して家計を助けることを重視していた。彼女たちもまた日本社会におけるフィリピン人女性の否定的イメージを意識してはいたが、金銭的報酬の高い水商売に従事する事例もみられ、日本社会におけるフィリピン人女性のステレオタイプの再生産に意図せず寄与していた。最後に「継承拒否」パターンでは、日本人女性の「品格」を理想として、自身のフィリピン・ルーツを否定して日本人に同化する意識が強くみられた。

本論文ではこのようにフィリピン系の女性たちの間に「女性性」の解釈や表出の仕方に

多様性があることを示し、そのことが学業や地位達成に影響を及ぼしていることを明らかにした。これまでのニューカマー研究ではジェンダーの要素がほとんど考慮されてこなかったが、第二世代の増加に伴い、今後は階層・エスニシティ・ジェンダーといった複合要因を視野におさめて学業や地位達成を検討していく必要がある。本調査では女性のみを対象としたが、男性の地位達成過程と比較検討していくことも今後の課題としたい。

また他のエスニック集団との比較を視野に入れながら、フィリピン系女性に特徴的な地位達成過程について事例を積み重ねて分析していくことも課題である。その試みとして挙げられる清水・角替・額賀 (2015) では、ベトナム系やペルー系の母娘関係はフィリピン系の母娘関係ほど親密ではなく、役割逆転 (ベトナム系) や親の権威の誇示 (ペルー系) が顕著であると報告されている。さらにフィリピン系女性の場合、親子間の文化継承の在り方が地位達成に強い影響を及ぼしていたが、ベトナム系やペルー系の女性の中にその傾向は強く見られなかった。他集団と比較したとき、家族中心主義を規範とする親密な母娘関係と強い文化継承がフィリピン系女性第二世代にみられる特徴であり、その様相が彼女たちの地位達成に影響を与えていることをあらためて指摘できるだろう。

《注》

- 1) 法務省HPより。 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001133760>
- 2) この数は妻をフィリピン人、夫を日本人とする結婚。厚生労働省HPより。
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei14/index.html>
- 3) アメリカの調査研究において移民第二世代は通常、「少なくともどちらか一方の親が外国生まれで本人はアメリカ生まれ、または外国生まれで12歳以前にアメリカに連れてこられた者」と定義されている (Portes&Rumbaut 2001, p.23)。本論文におけるニューカマー第二世代もこの定義を援用する。
- 4) 鍛冶 (2011) によれば、11歳時点で日本国内にいた者の高校在学率を国籍別に分析した結果、16歳時点で日本国籍者と韓国・朝鮮籍者の90%以上が高校に通っているのに対し、フィリピン国籍者は45%、ブラジル国籍者は50%となっている。また、大学在学率に関しても15歳時点で日本国内にいた者を国籍別に分析した結果、20歳時点で日本国籍者、韓国・朝鮮籍者が30%であるのに対して、フィリピン国籍者は5%、ブラジル国籍者は0%に近いという結果を出している。
- 5) 第二世代の青年期を扱った新しい研究として清水・チューブ (2015) や角替 (2015) がある。
- 6) 伊藤 (1995) は、80年代後半から90年代のエスニシティとジェンダーに関する研究の動向をまとめた上で、その主な関心は「民族・エスニック集団の境界、なかでも文化的な境界の維持に果たす女性の役割」であったと述べる。
- 7) このことは、女性たちが日本人とフィリピン人が混淆する存在としての自分を多様な表現を使って語り、フィリピン・ルーツを肯定的に受け入れていたことと関係する。
- 8) 中川 (1986) によれば、フィリピンの「家族主義」は社会的に強い規範となっている。家族は基本的な生活をともにする一世帯を意味し、往々にして親族や非血縁者を含む大家族となる。
- 9) これらの要素は先行研究でもフィリピン文化の特徴として言及される価値観や実践である (スタインバーグ 2000)。
- 10) フィリピン人女性は貧しく水商売に従事するという日本社会の偏見によってフィリピン系の子どもたちが学校でいじめを受け、母はストレスを抱えていることが指摘されている (高畑 2011)。
- 11) このパターンに該当する女性5人のうち、実際に送金をしているのは独身のF7とF8だけである。

他の3人は子育てで手一杯で日々の生活も楽ではなく、フィリピンの親族に送金したくてもできない状況に直面している。

- 12) 高畑・原 (2015) はフィリピン系 1.5 世代の間には、日本で一定期間教育を受けた後フィリピンの大学に進学し、日本を「中継点」としながら英語力を活かして国際的に活躍する「グローバル人材」志向の若者が出現していることを明らかにしている。本研究で示したように二世世代の間にも「グローバル人材」として上昇移動するフィリピン系ニューカマーの増加が予測される。

《参考文献》

- Espiritu, Y.L. 2003 *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. Berkeley: University of California Press.
- Gordon, M. 1964 *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*. New York: Oxford University Press.
- 本田由紀 2008 『家庭教育』の隘路—子育てに強迫される母たち』勁草書房。
- 伊藤るり 1995 「ジェンダー・階級・民族の相互関係—移住女性の状況をひとつの手がかりとして」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 ジェンダーの社会学』岩波書店、pp.209-226。
- 鍛冶到 2011 「外国人の子どもたちの進学問題—貧困の連鎖を断ち切るために」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』移住者と連帯する全国ネットワーク、pp.38-46。
- 三浦綾希子 2014 『ニューカマーの子どもと移民コミュニティー—二世世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房。
- 中川剛 1986 『不思議のフィリピン—非近代社会の心理と行動』NHKブックス。
- 額賀美紗子 2012 「トランスナショナルな家族の再編と教育意識—フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5: 7-12。
- 額賀美紗子 2014 「フィリピン系ニューカマー生徒の学業達成に関する一考察—トランスナショナルな家族ケアの影響に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』7: 77-97。
- 小ヶ谷千穂 2004 「滞日フィリピン女性の社会活動の多層性—日本における『移民／移動の女性化』のコンテクストからの一考察」伊藤るり編『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究—女性移住者のエンパワーメントと新しい主体形成の検討にむけて』2001-2003 年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.9-52。
- 小ヶ谷千穂 2005 「海外就労と女性のライフコース—フィリピン農村部の若年シングル女性世帯内関係をてがかりに」『ジェンダー研究』8: 99-111。
- Portes, A.&Rumbaut,R.G. 2001 *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. Berkeley: Russell Sage Foundation.
- 清水陸美・チュープサラーン 2015 「ニューカマー二世世代の青年期—義務教育の経験と就職後の生活状況との関係に注目して」『日本女子大学紀要人間社会学部』25: 35-49。
- 清水陸美・角替弘規・額賀美紗子 2015 「ニューカマー二世世代の青年期—ジェンダーをめぐるエスニシティ間比較」日本教育学会第 67 回大会発表資料。
- スタインバーグ、デイビッド J. (堀芳枝ほか訳) 2000 『フィリピンの歴史・文化・社会—単一にして多様な社会』明石書店。
- 高畑幸 2011 「在日フィリピン人の 1.5 世代—教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放教育』527(10): 54-63。
- 高畑幸・原めぐみ 2015 「在日フィリピン人の 1.5 世代—日本は定住地か、それとも通過点か」『国際県警・比較文化研究』13(1): 21-39。
- 竹ノ下弘久 2014 「グローバルな越境移動と子どもの教育—日本に居住する国際移民の事例から」渡辺秀

樹・竹ノ下弘久編『越境する家族社会学』学文社、pp.214-228。

徳永智子 2008 「[フィリピン系ニューカマー] 生徒の進路意識と将来展望—「重要な他者」と「来日経緯」に着目して—」『異文化間教育』 28: 87-99.

角替弘規 2015 「南米にルーツを持つニューカマー第二世代の青年期」『桐蔭論叢』 32: 29-36。

Wolf, D.L. 2002 "There's No Place Like "Home": Emotional Transnationalism and the Struggles of Second-Generation Filipinos." pp.255-294 in *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, edited by P. Levitt and M.C. Waters. New York: Russell Sage Foundation.

*本研究は平成 26 年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))「ニューカマー第二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成に関わる総合的調査」(課題番号 26285139 研究代表者:角替弘規) による研究成果の一部である。本調査で使用した 11 名のインタビューデータのうち 3 名分は同じ調査項目のもと調査協力者 2 名によって収集された。データ収集に協力してくれた職業能力開発大学の坪田光平さんと中京大学の三浦綾希子さんに深く感謝したい。

————— [ぬかが みさこ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授]